タームレポート・古典芸能から見る家族の絆

本レポートの目的——落語と文楽

　私は祖母の趣味から観劇をする機会に幼い頃から恵まれていた。一緒に狂言や能を鑑賞した他、文楽に最も親しんできた。その一方で落語は一度しか聞いたことがなかった。しかし本研究会で少ないながらも落語を聞き、文楽との相違点を意識するようになった。

　私は文楽にも落語にも大変感動することが多くあったが、私が感動した原因は両芸能とも共有しているように思われる。このタームレポートではその感動の共通要素について深めていく。

感動とは

　しかしここでまず感動とはどのようなものか定義しておく。鳴門教育大学佐々木智美、皆川直凡によると、感動は「心が強く動くような状態であり、(中略)場合によっては感動することによって何らかの変化をもたらす」ものである。特に学校教育現場では、「生きる力」「豊かな心」を育むために感動が重要だとされている。[[1]](#endnote-1)

感動の共通要素は何か

　ではなぜ両者は私を感動させるのか。私だけではなく、人々はなぜ感動するのだろうか。その感動の共通要素は「思い切った感情の発露」であると、私は考える。古典芸能においては、人々の感動が大変鮮やかに、明らかに描かれる。そしてその感情は往々にして激しく、大胆である。その起伏の激しい感情が、観客をして大いに感動せしめる。これこそが文楽や落語に感動する要因ではないだろうか。

　当然、芸能の種類ごとにどのような物語が扱われるか、どのような感情が描かれるか、は異なるのだが、各芸能が感動を呼び起こす原因はこの点に求められるはずである。

本レポートの対象

　そこで以降、落語と文楽で以下のことをそれぞれ確認する。

　第一に、どのような感情が主に扱われているのか。第二にその感情がどのように描かれているのか。この二点を考える。但し、作品の数が膨大にあり、作品のテーマを「家族の絆」に絞る。その理由は、今年2015年の初春講演から現在2015年７月までに行われた文楽が親子や家族に関するものが多かったからである。より具体的なテーマを確認すると以下の通りである。

　第一に、「家族の絆」に関して、喜怒哀楽のどのような感情が伴われているのか。第二にその感情がどのような筋書きで、どのような表現で描かれているのか。以降見ていく。

落語における描かれ方

　「家族の絆」について、扱う作品は、「唐茄子屋政談」「傘と赤い風車」とする。

1. 唐茄子屋政談

　唐茄子屋政談では、若旦那とその叔父夫婦が家族の役割を担う。実の親から勘当された若旦那を助けた叔父夫婦は若旦那にどのように接していたのか、ここで順を追って確認する。

　まず若旦那が勘当後の生活が余りに苦しく、自殺しようとしたとき、叔父がそれを止めて助けた。この時、叔父は彼が若旦那と気付かず助けたのであるが、若旦那と解った時に叔父が発した言葉は「お前だと解っていたら助けるのではなかった」というものであった。この言葉を字面だけ見ると若旦那にとって取りつく島がないように感じられる。しかしこのような言葉は本気で言えるものではなく、相手を大事にしているからこそ発せられるものと言える。放蕩の限りを尽くし、大見得を切って出て行った若旦那を諌めるためにあえて厳しい口調で、しかし内心愛情を込めて放った言葉である。

　叔父夫婦に養ってもらうことになった若旦那は頻繁に叔父から叱られる。しかし若旦那が自らの力で商売をやりきったとき、褒美を与えるなど大変労った。普段はとても厳しい叔父が若旦那のことを本当に思いやり、かわいがっていることが解る。

　「唐茄子屋政談」では家族の絆だけでなく、義理も描かれる。子供に食事さえ与えられない母親と話をした若旦那は「食べることができない辛さを知っているから」と言って、食べ物や儲賃をその母親に与えてしまったが、その理由は若旦那が食事の出来ない苦しさを知っているからだけでなく、叔父夫婦に助けてもらったことで、親のありがたみを強く感じ、その母親の健気な様子に深く感動したからでもあるだろう。

　「唐茄子屋政談」において家族の絆は、「時に厳しく、時に優しく」という形で描かれ、苦しい思いをした後も救われるという、ハッピーエンドのストーリーとなっている。

1. 傘と赤い風車

　この話は研究会では扱わなかったが、私が個人的に聞いて大変感動した話であり、親子の感情が生き生きと描かれている。

　幼い時に実の母を亡くした息子はその母の姉妹に育てられる。息子は今まで母と思っていた人が実の母ではないと知り、彼女を疎むようになる。ある日、息子は女を連れて、家出をして母との縁を完全に切ってしまおうとする。母からお守りとして渡されていた傘には赤い風車がついており、彼が幼い頃大事にしていたものだった。彼は子供っぽいその傘を何度も棄てようとするのだが、棄てる度に都合良く自分の手元に帰ってくる。また傘を棄てようとしたとき、彼は誤って川に転落してしまう。彼は気を失うが、傘の上に乗っており、更に傘についていた赤い風車が目立ったので助かった。虫の知らせで実家に戻った息子は自分の母親が死去したことを知った。その躯体は川に浸かったようにびっしょりしていた。息子は母親のその姿を見て泣き叫ぶのであった。

　この話では息子が母に対して嫌みを言う姿がしつこく描かれ、悪い印象を与える。息子の悪い印象に対して、母が彼を思う気持ちが並行して描かれ、彼女の死が描かれる場面で最高潮に達する。同時に息子が母の深い愛情に気付き感極まると同時に観客もつい涙してしまうのではないだろうか。

　「傘と赤い風車」において家族の絆は、母親が死んでしまうという悲劇があるとは言え、息子を救うことが出来て幸せだったのではないかと思わせる、心温まるストーリーで描かれている。

文楽における描かれ方

　「家族の絆」に関しここで扱う文楽作品は「彦山権現誓助剣」「一谷嫩軍記」である。

1. 彦山権現誓助剣

　この話は母親を亡くした主人公が新たに家族を作ってその絆を深めていく話である。

　剣の名人である主人公六助は親孝行に熱心で母を亡くして喪に服していた。そこに老婆を背負ったが通りかかり、彼と話をする。彼が大変に親思いであることを知った六助は近く行われる剣の試合でわざと敗れて、男が褒美を得られるように約束した。そして実際、六助はその約束を履行した。そんな折、六助は老人、赤ん坊、老婆、若い娘(お菊)に出会う。お菊は六助の許嫁であり、他の登場人物も彼女の親族であることが発覚する。六助と出会ったお菊は家族として生活をしていこうと決心する。今後幸せに暮らせると思われたのも束の間、六助が恩師とするお菊の父親は暗殺されており、六助は怒りを覚える。更に六助が怒りを覚えたのは、先ほど剣の試合をした親孝行な男の母親が殺されていることが解り、彼女は六助の知り合いの樵の母親であることが解った。そしてその人相から、その男がまさにお菊の父を殺した犯人だと発覚する。怒り心頭に発した六助はその犯人を討つことを誓い、犯人の後を追う。

　「彦山権現誓助剣」では、人間万事塞翁が馬の如く、禍福が連続して訪れる。家族を亡くして悲しむ六助に新しい家族が出来て、不幸を乗り切るために家族が団結するという、悲しくも勇ましい物語である。

1. 一谷嫩軍記

　これは二代目吉田玉男襲名の際に講演された記念すべき作品である。主人公熊谷直実は主君である義経の命により、敵の平敦盛を見逃し、代わりに実子である小次郎の首をはねた。義経は幼い頃平家に命を助けられており、その恩を返すために敦盛を見逃すよう直実に命じたのであった。世の無常を悟った直実はその後出家するのであった。

　たとえ主君の命令とは言え、息子の首を切る直実の気持ちは理解しがたい。しかしそれが封建制の世に生きるということであり、その時代独自の辛さや悲しさが観客を感動させるのである。

　「一谷嫩軍記」において家族の絆は、主君のためなら我が子の首をも取るという悲しくやるせない筋で描かれる。観劇中に観客から拍手がおこったシーンは２カ所ある。

　第一に直実が「一枝(一子すなわち小次郎を暗示)を斬るべし」とかかれた立て札を義経に見せるシーンで、直実の思い切った決意と勇ましさが迫力を伴って演じられる。

　第二に、直実の妻相模が息子の死を知って嘆き悲しむシーンである。最愛の息子を失った相模の悲嘆の心情が、人形に魂が宿ったかのように見事に表現される。観客が拍手を送った両場面は作品の中で感情が最も溢れ出る場面であり、そこが見事に演じられたために観客も感動したと考えられる。

各作品に共通する特徴

　以上、4つの作品の筋と親子の絆の描かれ方を確認したが、四つの作品で共通する要素は如何なるものであったか、ここで纏めてみる。

　芸能の比較から、落語は最終的に救われる話であるが、文楽は悲しみの連続を生き抜く人々の強さが描かれている。

　作品を具体的に見ると、「唐茄子屋政談」では、時に厳しく時に優しい叔父夫婦や、人間的に大きく成長した若旦那の内面的な変化が描かれる。

　「傘と赤い風車」では、嫌見たらしく悪印象を与えるキャラクターである息子が母の愛情に気付いて号泣するという大きな感情の変化が描かれる。

　「彦山権現誓助剣」では、家族を失った悲しみと新しい家族が団結する決意が描かれ、感情の起伏が大きい。

　「一谷嫩軍記」では、斬られたのは他人の子供と思っていた相模が自分の子の死を知って泣き悲しむも、それを世の無常として割り切らざるを得ないやるせなさという激しい感情の変化が演じられる。

感動の原因

　各演目で激しい感情の起伏が描かれた。私が感動し、気に入った作品は全てこの激しい感情を伴っていた。観客も作品の中の感情の大きな変化につられてしまうのではないだろうか。登場人物の内面の変化と同時に観客の内面でも大きな変化が生じているのではないだろうか。

　最初に挙げた感動の定義を確認すると、感動は「心が強く動く」状態であった。作品の中の感情の変化が観客の心を大きく動かしたなら、それは感動として認識されるのではないだろうか。

　更に感動の定義には「生きる力」「豊かな心」というものもあった。作品中に描かれる感情の変化は大きな出来事から生じるものであり、その出来事に負けない「生きる力」が描かれる。そして感情が変化するということは、感動のレパートリーが豊富だということである。観客は作品の「生きる力」「豊かな心」を共有しているのかもしれない。

実生活の中の感情

　古典芸能の豊かな感情、感情の劇的な変化が感動をもたらすのではないか。では実生活で同様の体験はしないのだろうか。残念ながら実生活で我々が感情を明らかにする機会は大変少ない。経済的な問題が重視される世の中で、感情的なやりとりよりも、それと反対の理性的なやりとりが求められる。仕事と私情を分けるという態度から始まり、感情よりも打算の方が役に立つし、求められる社会で我々は内面が貧しくなっているのではないだろうか。そんな生活のある一点で古典芸能の豊かで、堂々と発散される感情に我々は引き寄せられるのではないだろうか。

まとめ

　「私と落語」、或は「私と古典芸能」という以上の観点から、現代人が実際に触れる機会の少ない、激しく、豊かな、感情の発露こそが人々を感動させる大きな要因ではないだろうか。まさしく「生きる力」「豊かな心」を養うために、より古典芸能に接することが可能な社会を我々は構想していくべきである。

1. 佐々木智美、皆川直穂　「大学生・大学院生が想起する感動体験の特徴の分析—自伝的記憶としての感動体験— [↑](#endnote-ref-1)